

# 平成 27 年 5 月 24 日放送

富山教区 黒東組 善稱寺 萩原淳

煩惱にまなこさへられて  
摂取の光明みざれども  
大悲ものうきことなくて  
つねにわが身をてらすなり

おはようございます。今から段々と暑い季節がやってきます。夏休みともなると近所の子供たちが、ラジオ体操をするために、寺の境内に集まってきます。昨年のラジオ体操は、とても暑かった記憶があります。それはなぜかという、日影がなかったからです。寺の境内の中心には、樹齢百五十年ほどのイチョウの木があります。そのイチョウの枝が伸びすぎたので、夏前に枝おろしをしてもらっていたのです。そのイチョウの木が作る影がなかったために、その影に入ることができませんでした。影ひとつにも、イチョウの木が作り出す影、おかげ様があるのだなど、思わずにはおれませんでした。

現在高校生のわたしの子供が、それこそラジオ体操をいていたころの小学6年生の夏休み、寺でお泊まり会をすることになりました。安請け合いをしたものの、やってくる人数は本人も含め十四人だということです。十四人分の布団を用意し、広間に運びました。食事は寺の台所で、子供たち自身でカレーを作ることになりました。ほっとしていると、もう一つ大問題がありました。夏場なので汗をかく為、全員が入るお風呂の段取りもつけなくてはなりません。そこで近くのお風呂屋さんを探してみると、片道十キロ弱ほどのところに、適なお風呂屋さんが見つかりました。そこで十四人を、七人ずつの二班に分け、まづ第一班からスタートしました。八人乗りの車を私が運転し、子供を七人乗せてお風呂屋さんまで行きます。第一班を降ろし、戻ります。次に第二班を乗せ、お風呂屋へ出発。二班を降ろして、第一班を車に乗せます。一班を連れて帰り、降ろしたら再びお風呂屋へ向かいます。到着後入浴の終わった第2班を車に乗せ、連れて帰ります。車内の子供たちは楽しそうに話をしています。寺まで戻ると、そのままは友達同士話をしながら、「わーっ」と車を降りていきました。私はどっと疲れて、(フーっと)ため息をついた事を今でも覚えています。その時私は、(子供というものは、親の苦労がわからんものだ)と考えていました。たかが送り迎え、されど送り迎え。送り迎えは、なかなか大変です。

そんな私も、自分が高校生の時には、親に送り迎えしてもらっていました。生まれは広島で、かなり山奥に実家があった為、バスで四十分通学に時間がかかります。また部活で野球をやっていたので、帰りが遅くなります。夕方六時半のバスを逃すと、最終の八時半までバスが来ません。その日もバスに遅れ、途方に暮れていると、父親が車で通りかかります。次の日も次の日も。(あー良かった。)と思うだけで、次の瞬間には自分の疲れたこと、宿題のことなどを考えていました。タイミングよく迎えに来るのが当たり前。親の都合を考えることも、感謝の気持ちを持つことありません。そんなに都合よく迎えに来られるはずもなく、バスの時間に合わせるのも大変であつたらうに、当時の私は、全く親の苦労などに目がいけないばかりか、自分が気づかないだけでそんなものは無いと、いや、そのことに心を馳せることもありませんでした。

立場が変われば見方も変わってきます。私が高校生の時には、自分のことしかほとんど考えていなかったように思えます。なぜ学校へ行くことができていいのか？心配も無く部活動ができるのはなぜなのか？毎日食べる物はどういう過程を経て私の前に並んでいるのか？着るもの、使う筆記用具、道具など、私が手にできている物は、どうして私が持つことができるようになったのでしょうか？ほとんどのことが、自分以外のおかげ様であるにも関わらず、考えることは自分のことだけ、自分を支えてくれている物には心が向きません。そういったことに立場が変わることによって、少しだけ気付かせてもらえるようになるのです。

しかしそれでも、全てのおかげ様に気付くわけではありません。木陰で一息つくときも、お日様を遮ってくれる枝葉には心を寄せても、目に見えないイチョウの木の根っこにまで思い至ることはありません。でも見えないからといって、根っこが無いわけでも、大切にないわけでもありません。見えない部分によって、見えている部分が支えられています。私の周りには見えないおかげ様が、数限りなくあるのではないのでしょうか。

私は、私の立場を超えることができません。どこまで行っても私の立場からでしか、物事を見ることができません。自分中心の考え、自分に都合のいいことのみを求め、おかげ様に心を閉ざしている姿を、親鸞聖人のお言葉では、**煩惱にまなこさへられて**と、示しておられるのでしょうか。そういう自分にとらわれ、煩惱に心を覆われて、おかげ様に気付くこともない私。しかし、そんな私を心配して、常に心を差し向け、迎えに来て下さるはたらきをも、続けて示されます。

**煩惱にまなこさへられて**  
**摂取の光明みざれども**  
**大悲ものうきことなくて**  
**つねにわが身をてらすなり**

私を心配し、休みなく照らし続けてくださるみ仏を、阿弥陀如来といいます。昔の方々は、「まことのみ親」と呼んでいました。まことのみ親である阿弥陀如来の大いなるはたらきは、私の気づきに関係なく、常に私に届いています。私をおさめ取り、阿弥陀如来の世界、お浄土に必ず連れて帰ると、寄りそってくださっています。そこにどれだけのご苦労があったかに心至るならば、それこそそれは、阿弥陀如来のはたらきであり、私を迎えに来られたみ親、南無阿弥陀仏でありましょう。

この身にかけられた、身に余るおかげ様を全て知ることは、もちろんできません。だからこそ、南無阿弥陀仏ひとつで救い取ると願われたのであり、迎えに来られたのであり、おさめ取って捨てられない私のみ親、南無阿弥陀仏と、遠慮なく称えさせて頂けるのです